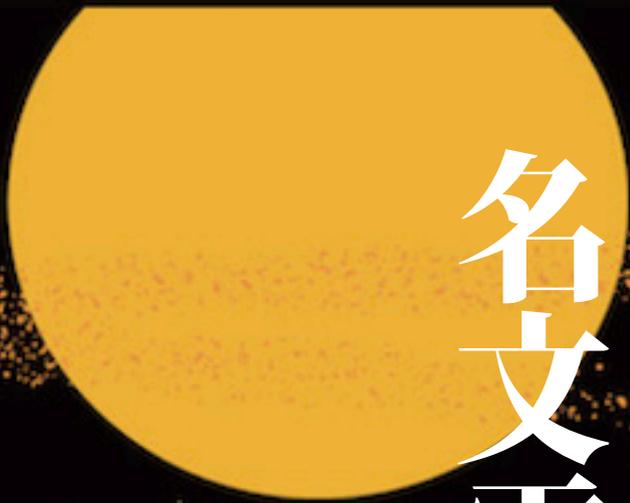


名文電子読本



目次

(左に並んだ古典のタイトルをクリック又はタップするとその頁に移動します。)

名文とは・永訣の朝 宮沢賢治

おくのほそ道 漂泊の思ひ 松尾芭蕉

おくのほそ道 平泉 松尾芭蕉

春夜桃李園に宴するの序 李白

左遷せられて藍關に至り姪孫湘に示す 韓愈

江雪 柳宗元

赤壁賦 蘇軾

夢に胡蝶となる 莊子

華嚴経 唯心偈 仏典

修証義 道元(正法眼蔵要文)

白骨の御文章 蓮如

風姿花伝 世阿弥

花鏡 世阿弥

南方録 南坊宗啓(千利休述)

五輪書 宮本武蔵

葉隠 山本常朝

知恵袋 森鷗外

論語と算盤 渋沢栄一

論語 学而第一 第一章 孔子述

夜直 王安石

春夜 蘇軾

おくのほそ道 旅立ち 松尾芭蕉

おくのほそ道 白河の関 松尾芭蕉

一枚起請文 法然

歎異抄 唯円(親鸞述)

会社・著作権情報 お問い合わせフォーム



名文とは

けふのうち

とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ
みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ
(あめゆじゆとてちてけんじや)

おまへがたべるこのふたわんのゆきに
わたくしはいまこころからいのる
どうかこれが兜率の天の食に変わつて
やがてはおまへとみんなとに聖い資糧をもたらすことを
わたくしのすべてのさいわひをかけてねがふ



名文とは

けふのうちにとほくへいつてしまふわたくしのいもうとよみぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ
(あめゆじゆとてちてけんじや)

おまへがたべるこのふたわんのゆきに
わたくしはいまこころからいのる
どうかこれが兜率の天の食に変わつて
やがてはおまへとみんなとに聖い資糧をもたらすことを
わたくしのすべてのさいわひをかけてねがふ

永訣の朝 宮沢賢治

けふのうちに

とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ
みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ
(あめゆじゆとてちてけんじや)

うすあかくいつさう陰惨な雲から
みぞれはびちよびちよふつてくる

(あめゆじゆとてちてけんじや)

青い蓴菜のもやうのついた

これらふたつのかけた陶椀に

おまへがたべるあめゆきをとらうとして
わたくしはまがつたてつぼうだまのやうに
このくらいみぞれのなかに飛びだした

(あめゆじゆとてちてけんじや)

蒼鉛いろの暗い雲から

みぞれはびちよびちよ沈んでくる

ああとし子

死ぬといふいまごろになって

わたくしをいつしやうあかるくするため
こんなさつぱりした雪のひとわんを

おまへはわたくしにたのんだのだ

ありがたうわたくしのけなげないもうとよ
わたくしもまつすぐにすすんでいくから

(あめゆじゆとてちてけんじや)

永訣の朝 宮沢賢治

けふのうちに

とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ
みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ
(あめゆじゆとてちてけんじや)

うすあかくいつさう陰惨な雲から
みぞれはびちよびちよふつてくる

(あめゆじゆとてちてけんじや)

青い蓴菜のもやうのついた

これらふたつのかけた陶椀に

おまへがたべるあめゆきをとらうとして

わたくしはまがつたてつぼうだまのやうに

このくらいみぞれのなかに飛びだした

(あめゆじゆとてちてけんじや)

蒼鉛いろの暗い雲から

みぞれはびちよびちよ沈んでくる

ああとし子

死ぬといふいまごろになって

わたくしをいつしやうあかるくするため

こんなさつぱりした雪のひとわんを

おまへはわたくしにたのんだのだ

ありがたうわたくしのけなげないもうとよ

わたくしもまつすぐにすすんでいくから

(あめゆじゆとてちてけんじや)

はげしいはげしい熱やあえぎのあひだから
おまへはわたくしにたのんだのだ

銀河や太陽、気圏などとよばれたせかいの
そらからおちた雪のさいごのひとわんを……

…ふたきれのみかげせきざいに
みぞれはさびしくたまつてゐる

わたくしはそのうへにあぶなくたち
雪と水とのまつしろな二相系をたち

すきとほるつめたい雫にみちた

このつややかな松のえだから

わたくしのやさしいもうとの

さいごのたべものをもらつていかう

わたしたちがいつしよにそだつてきたあひだ
みなれたちやわんのこの藍のもやうにも

もうけふおまへはわかれてしまふ

(Ora Orade Shitori egumo)

ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ

あああのときされた病室の

くらいびやうぶやかやのなかに

やさしくあをじろく燃えてゐる

わたくしのけなげないもうとよ

はげしいはげしい熱やあえぎのあひだから
おまへはわたくしにたのんだのだ

銀河や太陽、気圏などとよばれたせかいの
そらからおちた雪のさいごのひとわんを……

…ふたきれのみかげせきざいに
みぞれはさびしくたまつてゐる

わたくしはそのうへにあぶなくたち
雪と水とのまつしろな二相系をたち

すきとほるつめたい雫にみちた

このつややかな松のえだから

わたくしのやさしいもうとの

さいごのたべものをもらつていかう

わたしたちがいつしよにそだつてきたあひだ
みなれたちやわんのこの藍のもやうにも

もうけふおまへはわかれてしまふ

(Ora Orade Shitori egumo)

ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ

あああのときされた病室の

くらいびやうぶやかやのなかに

やさしくあをじろく燃えてゐる

わたくしのけなげないもうとよ

この雪はどこをえらばうにも
あんまりどこもまつしろなのだ
あんなおそろしいみだれたそらから
このうつくしい雪がきたのだ

(うまれでくるたて

こんどはこたにわりやのごとばかりで
くるしまなあよにうまれてくる)

おまへがたべるこのふたわんのゆきに
わたくしはいまころからいのる
どうかこれが兜率の天の食に変わつて
やがてはおまへとみんなとに聖い資糧をもたらすことを
わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

この雪はどこをえらばうにも
あんまりどこもまつしろなのだ
あんなおそろしいみだれたそらから
このうつくしい雪がきたのだ

(うまれでくるたて

こんどはこたにわりやのごとばかりで
くるしまなあよにうまれてくる)

おまへがたべるこのふたわんのゆきに
わたくしはいまころからいのる
どうかこれが兜率の天の食に変わつて
やがてはおまへとみんなとに聖い資糧をもたらすことを
わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

おくのほそ道 漂泊の思い

松尾芭蕉



漂泊の思ひ

月日は百代の過客にして、行きか
ふ年も又旅人也。船の上に生涯を浮
かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる
物は、日々旅にして旅を栖みかとす。
古人も多く旅に死せるあり。

予もいづれの年よりか、片雲の風
に誘はれて、漂泊の思ひやまず、海
浜にさすらへ、去年の秋、江上の破
屋に蜘蛛の古巢をはらひて、やゝ年
も暮れ、春立てる霞の空に、白河の
関越えんと、そゞろ神の物につきて
心を狂はせ、道祖神の招きにあひて
取るもの手につかず、もゝ引の破れ
をつゞり、笠の緒付けかへて、

漂泊の思ひ

月日は永遠にとどまることなく旅を続ける旅人であり、

月日は百代の過客にして、

船の上で生涯を送る船頭、

行きか

やって来る年もまた同じく旅人である。

ふ年も又旅人也。船の上に生涯を浮

馬のくつわをとって老いを迎える馬子は、

かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる

その毎日が旅であり旅をその住処としている。

物は、日々旅にして旅を栖みかとす。

昔の人（昔の歌人・詩人）も数多く旅の途中に亡くなっている。

古人も多く旅に死せるあり。

私もいつの頃からか、

予もいづれの年よりか、片雲の風

ちぎれ雲が風に飛んで行く

様子に誘われて、

に誘はれて、漂泊の思ひやまず、海

当てもなく彷徨したいという思いがやまず、

海浜

（の地方）をさすらい（旅をし）、

去年の秋、

川（隅田川）のほとりの

浜にさすらへ、去年の秋、江上の破

あばらやに（旅から）帰って蜘蛛の巣をはらいのけて（住んでいるうちに）、

やがて年も暮れ、

屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やゝ年

春になり霞の立った空を見るにつけ、

（次は）白河の関を越えて

も暮れ、春立てる霞の空に、白河の

（奥州を）旅してみたいと、

（人の心を誘惑する）そゞろ神が身に取っついて私の心を狂わせ、

関越えんと、そゞろ神の物につきて

（旅の道中を守る）道祖神が旅に招いてくれているようだ、

心を狂はせ、道祖神の招きにあひて

取るものも手につかず、

ももひき（股引）の破れを繕い、

取るものも手につかず、もゝ引の破れ

笠の緒を付け替え、

をつゞり、笠の緒付けかへて、

三里に灸すゆるより、松島の月先づ心にかゝりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

面八句を庵の柱に掛け置く。

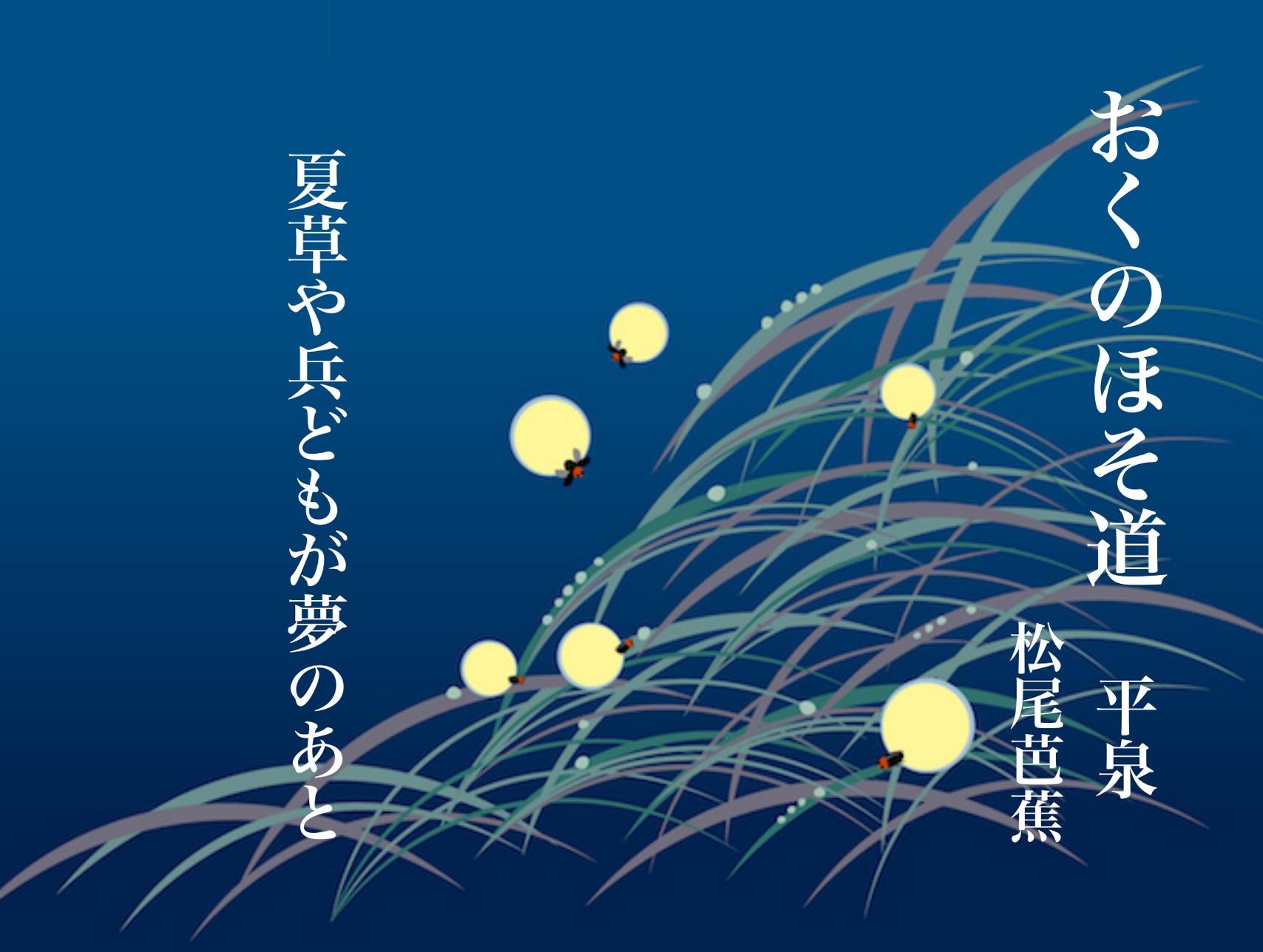


三里（膝のつぼ）に灸をすえると、
三里に灸すゆるより、松島の月がまず心にかかった（気にかかった）
松島の月先づ心（杉風の別荘に）に
かゝりて、住める方は人に譲り、
杉風が
別墅に移るに、

この草庵も住む人の替わる時が来た。今度は雛人形を飾った華やかな家になることだろう。
草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

この句を発句にして面八句を草庵の柱に掛け置いた。
面八句を庵の柱に掛け置く。





おくのほそ道

平泉

松尾芭蕉

夏草や兵どもが夢のあと

平泉

三代の栄耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鷄山のみ形を残す。まづ高館にのぼれば、北上川南部より流るる大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさしかため、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の叢となる。国破れて山河あり、城春にして草青みたり、と、笠打ち敷きて時の移るまで涙を落としはべりぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房みゆる白毛かな 曾良

平泉

前頁

奥州藤原氏三代の栄華は一眠りしている間に見る夢の如きもので、

館の正門

三代の栄耀一睡のうちにして、大門

秀衡の屋敷跡は田や野原と

の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は

金鶏山のみか今もその姿を残している。

田野になりて、金鶏山のみ形を残す。

(目に入る)北上川は南部地方から流れて

まづ高館にのぼれば、北上川南部より

衣川は和泉が城をめぐって流れ、

流るる大河なり。衣川は和泉が城をめ

高館の下で大河(北上川)と合流する。

ぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。

衣が関を挟んで南部方面からの入り口を嚴重に固め(警戒し、

泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部

蝦夷の侵入を防いでいると見えた。

口をさしかたため、夷を防ぐと見えたり。

それはそうと、義経は忠義の家臣を選びすぐつてこの城にたてこもり(戦ったが)。

さても義臣すぐつてこの城にこもり、

その功名も一時の夢で、(今はただの)草むらとなつている。国は戦いに敗れても山河は変わらなすにあり、

功名一時の叢となる。国破れて山河あ

(荒廃した)城の中にも春がやってきて草が青々と茂っている、と、(杜甫の詩を思い出しながら)笠を敷いて

り、城春にして草青みたり、と、笠打

座り、いつまでも(昔をしのんで)涙を落としたのでありました。

ち敷きて時の移るまで涙を落としはべ
りぬ。

高館からながめる草むらは夏草が青々と生い茂り、そこは嘗て兵どもが一時の夢の功名を争つた場所だ。

夏草や兵どもが夢の跡

真つ白い卵の花を見ていると白髪を振り乱して奮戦する兼房が見えることだ。

卵の花に兼房みゆる白毛かな 曾良

次頁

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。経堂は三将の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散りうせて玉の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、すでに頽廃空虚の叢となるべきを、四面新たに囲みて、藁を覆ひて風雨を凌ぎ、しばらく千歳の記念となれり。

五月雨の降り残してや光堂

かねてよりその評判を聞いて驚いていた二堂（經堂と光堂）が開帳されていた。

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經

經堂

には（清衡、基衡、秀衡）三将の像が残されており、

光堂にはこの三代の棺を納め、

堂は三将の像を残し、光堂は三代の棺

（阿弥陀如来、観音菩薩、勢至菩薩）

三尊の仏が安置されている。光堂の七宝の装飾は散り

を納め、三尊の仏を安置す。七宝散り

失せて、

珠寶の扉は風雨に破れ、

金箔の柱は霜や雪に朽ち果て、

うせて玉の扉風に破れ、金の柱霜雪に

もう少しで崩れ果てて何もない草むらとなるべきところを、

朽ちて、すでに頽廃空虚の叢となるべ

四方を新しく囲んで、

瓦屋根を覆って風雨を凌ぎ、

きを、四面新たに囲みて、薨を覆ひて

しばらくは千年（長い年月）を偲ぶ記念物となっている。

風雨を凌ぎ、しばらく千歳の記念とは

なれり。

五月雨がここだけは降り残したかのような光堂が今も建っている。

五月雨の降り残してや光堂

春夜宴桃李園序

李白

夫天地者万物之逆旅、光陰者百代之過客。而浮生若夢、為歡幾何。古人秉燭夜遊、良有以也。況陽春召我以煙景、大塊假我以文章。



春夜桃李の園に宴するの序 李白

夫れ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり。而して浮生は夢の若し、歡を為すこと幾何ぞ。古人燭を秉りて夜遊ぶは、良に以有るなり。況んや陽春我を召くに烟景を以てし、大塊我に仮すに文章を以てするをや。桃李の芳園に会して、天倫の樂事を序す。群季の俊秀は、皆惠連たり。吾人の詠歌は、独り康樂に慚づ。幽賞未だ已まず、高談転た清し。瓊筵を開きて以て花に坐し、羽觴を飛ばして月に酔ふ。佳詠有らずんば、何ぞ雅懷を伸べん。如し詩成らずんば、罰は金谷の酒斗数に倚らん。

春の夜に桃李の園の詩宴で作った序

春夜桃李の園に宴するの序 李白

そもそも天地はあらゆるものを迎え入れる宿であり、

夫れ天地は万物の逆旅にして、月日（時の流れ）光陰は

永遠の旅人である。

そしてはかない人生は（一瞬の）夢のようなものであり、

百代の過客なり。而して浮生は夢の若し、
歡を為すこと幾何ぞ。古人燭を秉りて夜

歡ひ樂しむ時がどれほどあろうか。

昔の人が灯を手にとって夜も遊んだのは、

本主に理由があるのだ（まことにもつともなことだ）。

ましてうららかな春はかすみのかか

遊ぶは、良に以有るなり。況んや陽春我

つた春景色で私を招き、

造物主が私に文章を書く才能を貸し与え

を召くに烟景を以てし、大塊我に仮すに

桃と李の花が香しい園に集まって、

文章を以てするをや。桃李の芳園に会し

兄弟親族と楽しい詩宴を繰り広げる。

すぐれた才能を持つ年少の従兄弟達は、

て、天倫の樂事を序す。群季の俊秀は、

皆謝惠連のようである。

私の詠む歌は、

一人謝惠連に及ばず恥じる

皆惠連たり。吾人の詠歌は、独り康樂に

ばかりだ。

静かに景色を味わうことは終わらず、

高尚な談話がますますはずみ気分は清らかだ。

慚づ。幽賞未だ已まず、高談転た清し。

立派な宴席を開いて花の下に座り、

羽飾りのついた杯を交わして

瓊筵を開きて以て花に坐し、羽觴を飛ば

月に酔う。

すぐれた詩が詠めなければ、

どうして

して月に酔ふ。佳詠有らずんば、何ぞ

風雅な心を述べられようか。

もし詩ができなければ、

罰は

雅懷を伸べん。如し詩成らずんば、罰

金谷園の故事にならった酒の杯数を飲むことにしよう。

は金谷の酒斗数に倚らん。

左遷至藍關

示姪孫湘

韓愈



左遷至藍關示姪孫湘

韓愈

一封朝奏九重天
夕貶潮州路八千
欲爲聖明除弊事
肯將衰朽惜殘年
雲橫秦嶺家何在
雪擁藍關馬不前
知汝遠來應有意
好收吾骨瘴江邊

左遷せられて藍關に至り姪孫湘に示す

左遷至藍關示姪孫湘

韓愈

一封朝に奏す九重の天

一封朝奏九重天

夕べに潮州に貶せらる路八千

夕貶潮州路八千

聖明の為に弊事を除かんと欲す

欲爲聖明除弊事

肯て衰朽を將て殘年を惜まらんや

肯將衰朽惜殘年

雲は秦嶺に横つて家何くにか在る

雲橫秦嶺家何在

雪は藍関を擁して馬前まず

雪擁藍關馬不前

知る汝が遠く來たる心に意有るべし

知汝遠來應有意

好し吾が骨を取めよ瘴江の辺

好收吾骨瘴江邊

左遷せられて藍關に至り

姪孫湘に示す

韓愈

一封朝に奏す九重の天

夕べに潮州に貶せらる路八千

聖明の為に弊事を除かんと欲す

肯て衰朽を將て残年を惜まんや

雲は秦嶺に横つて家何くにか在る

雪は藍関を擁して馬前まづ

知る汝が遠く来たる応に意有るべし

好し吾が骨を収めよ瘴江の辺

左遷させられ藍田関に至って

左遷させられて藍關に至り

姪孫の湘に示す。

姪孫湘に示す

韓愈

朝一通の意見書を奥深い宮中の天子に奏上した。

一封朝に奏す九重の天

すると、もう夕方には八千里離れた潮州に左遷させられた。

夕べに潮州に貶せらる路八千

聡明で徳の高い天子の為に国の弊害を取り除こうと思ったまでのことだ。

聖明の為に弊事を除かんと欲す

衰え朽ちた身でどうして残り少ない命を惜しむだろう。

肯て衰朽を将て残年を惜まんや

雲は秦嶺の山々に横たわって我家がどこにあるかもわからない。

雲は秦嶺に横つて家何くにか在る

雪は藍田関をおおいつくし馬は前に進もうともしない。

雪は藍関を擁して馬前まず

私にはわかるよ。お前がはるばる来てくれたのは何か意（思ひ）を決することがあってのことだろう。

知る汝が遠く来たる応に意有るべし

よし私の骨を拾い取めてくれ、毒気の立ちこめる南方の川で。

好し吾が骨を収めよ瘴江の辺

江雪

柳宗元

江雪
柳宗元

千山鳥飛絕
萬徑人蹤滅
孤舟蓑笠翁
獨釣寒江雪

江雪 柳宗元

千山

千山鳥飛絶

鳥飛ぶこと絶え

万径

万径人踪滅

人蹤滅す

孤舟

孤舟蓑笠翁

蓑笠の翁

独り釣る

独釣寒江雪

寒江の雪

江雪 柳宗元

千山鳥飛ぶこと絶え

万径人蹤滅す

孤舟、蓑笠の翁

独り釣る寒江の雪

江雪 柳宗元

あらゆる山々から鳥の飛ぶ姿が見えなくなり。

千山鳥飛ぶこと絶え

すべての道から人の足跡が消えてしまった。

万径人蹤滅す

一艘の小舟に、

蓑笠をつけた老人がのっている。

孤舟、蓑笠の翁

寒江の雪の中、たった一人で釣をしている。

独り釣る寒江の雪



赤壁賦

蘇軾

壬戌之秋、七月既望、蘇子與客
泛舟、遊於赤壁之下。
清風徐來、
水波不興。

客亦知夫水與月乎、逝者如斯而
未嘗往也。盈虛者如彼、而卒莫
消長也。

赤壁賦 壬戌秋、七月既望 蘇軾

壬戌の秋、七月既望、蘇子客と舟を
泛べて、赤壁の下に遊ぶ。清風徐ろに
来たりて、水波興らず。酒を挙げて客
に属め、明月の詩を誦し、窈窕の章を
歌ふ。少焉くして、月東山の上に出で、
斗牛の間に徘徊す。白露江に横たはり、
水光天に接す。一葦の如く所を縦にし
て、万頃の茫然たるを凌ぐ。浩浩乎と
して虚に馮り風に御して、其の止まる
所を知らずがごとく、飄飄乎として世
を遺れて独り立ち、羽化して登仙する
がごとし。

赤壁の賦

壬戌の秋、

七月既望

蘇軾

赤壁賦

壬戌の秋、七月既望

蘇軾

壬戌の秋、

七月の陰曆十六日、

蘇君（私）は客（友人）と舟を浮かべて、

壬戌の秋、七月既望、蘇子客と舟を

赤壁の下で遊んだ。

すがすがしい風がゆっくり

泛べて、赤壁の下に遊ぶ。清風徐ろに

吹いて来て、

水面は波もなく穏やかだった。

酒を手にとって客に勧め、

来たりて、水波興らず。酒を挙げて客

明月の詩を口ずさみ、

窈窕の章を歌った。

に属め、明月の詩を誦し、窈窕の章を

しばらくして、

月は東の山の上に出て、

歌ふ。少焉くして、月東山の上に出で、

斗宿と牛宿の間をさまよい動いた。

白露の時節の霧が川に横たわり（立ち込め）、

斗牛の間に徘徊す。白露江に横たはり、

水面の光が天と境を接す。

小舟の行く所を川の流れにまかせて、

水光天に接す。一葦の如く所を縦にし

広々とした水面をとりとめもなく進んでいく。

果てしなく広大な虚空の

て、万頃の茫然たるを凌ぐ。浩浩乎と

中を風に乗って、

どこまで飛んでいくのかさえ

して虚に馮り風に御して、其の止まる

わからないほどだ、

飄々と世俗を忘れて一人きり、

所を知らずがごとく、飄飄乎として世

羽が生えて仙人となり天に昇る気分だ。

を遺れて独り立ち、羽化して登仙する

がごとし。

赤壁賦 客亦知夫水与月乎 蘇軾

蘇子曰く、「客も亦夫の水と月とを知るか。逝く者は斯くの如くして、而も未だ嘗て往かざるなり。盈虚する者は彼の如くして、而も卒に消長する莫きなり。蓋し將た其の変化する者自りして之を觀れば、則ち天地は曾ち以て一瞬なる能わず。其の変ぜざる者自りして之を觀れば、則ち物と我と皆尽くる無きなり。而るに又た何をか羨まんや」。



赤壁の賦

客も亦夫の水と月とを知るか

赤壁賦

客亦知夫水与月乎

蘇軾

蘇君（私）は言った、

『客人（君）もまたこの水（川の流れ）と月とを知っているだろう。』

蘇子曰く、「客も亦夫の水と月とを知

過ぎ行くもの（この川の流れ）は、あのように絶え間なく流れ続けるが、それなのに未だ

るか。逝く者は斯くの如くして、而も未

かつて行ったきりなくなつてしまつたことはない。

月はかのように満ち欠けするが、

だ嘗て往かざるなり。盈虚する者は彼の

それなのについに消え去ることも大きくなることもない。

如くして、而も卒に消長する莫きなり。

思ふにやはり、変化するという観点からこれをみれば、

蓋し將た其の變化する者自りして之を觀

つまり天地は一体全体一瞬たりとも同じ状態ではないではないか。

れば、則ち天地は曾ち以て一瞬なる能わ

その変化しないという観点からこれをみれば、

ず。其の變ぜざる者自りして之を觀れば、

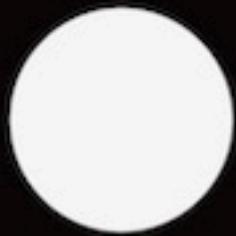
つまり万物も私も皆尽きる所はない（永遠の存在である）。

それなのに又何を

則ち物と我と皆尽くる無きなり。而るに

羨むというのだ（羨むことなどないではないか）。

又た何をか羨まんや」。





夢に胡蝶となる

莊子 齊物論

夢に胡蝶となる

莊子 齊物論

昔者莊周夢に胡蝶と為る。栩栩然として胡蝶なり。自ら喩しみて志に適えるかな。周たるを知らざるなり。俄然として覚むれば、則ち蘧々然として周なり。知らず、周の夢に胡蝶と為れるか、胡蝶の夢に周と為れるかを。周と胡蝶とは、則ち必ず分有らん。此を之れ物化と謂う。



夢に胡蝶となる 莊子 齊物論

いつのころだったか、わたしは夢で胡蝶となった。

昔者莊周夢に胡蝶と為る。栩栩然とし

思いのままに心ゆくまで舞い遊んだ。

て胡蝶なり。自ら喩しみて志に適える

そして、自分が莊周であることさえ忘れてしまった。

かな。周たるを知らざるなり。俄然と

と、まぎれもなく自分は莊周である。

して覚むれば、則ち蘧々然として周な

わからない、莊周が夢で胡蝶となったのか、

り。知らず、周の夢に胡蝶と為れるか、

胡蝶が夢で莊周となったのか。

莊周と胡蝶とは、まった

胡蝶の夢に周と為れるかを。周と胡蝶

く別の存在である（しかし莊周が胡蝶となり、胡蝶が莊周となる）。

これを物化（万物の変化）と

とは、則ち必ず分有らん。此を之れ物

いう。

化と謂う。



華嚴經

唯心偈

華嚴經唯心偈

心如工畫師 畫種種五蘊

一切世界中 無法而不造。

如心佛亦爾 如佛衆生然

心佛及衆生 是三無差別。

諸佛悉了知 一切從心轉

若能如是解 彼人見眞佛。

心亦非是身 身亦非是心

作一切佛事 自在未曾有。

若人欲求知 三世一切佛

應當如是觀 心造諸如來。

華嚴經唯心偈

心は巧みなる画師の

心如工畫師

一切の世界の中に

一切世界中

心の如く仏も亦た爾り

如心佛亦爾

心と仏と及び衆生と

心佛及衆生

諸仏は悉く了知したもう、

諸佛悉了知

若し能く是の如く解せば、

若能如是解

心も亦た是れ身に非ず、

心亦非是身

一切の仏事を作すに

作一切佛事

若し人求知せんと欲せば、

若人欲求知

应当に是の如く観ずべし、

應當如是觀

種々の五蘊を画くが如く、

畫種種五蘊

法として造らざる無し。

無法而不造。

仏の如く衆生も然り、

如佛衆生然

是の三に差別無し。

是三無差別。

一切は心より転ずと

一切從心轉

彼の人は眞の仏を見ん。

彼人見眞佛。

身も亦た是れ心に非ざるも、

身亦非是心

自在なること未曾有なり。

自在未曾有。

三世の一切の仏を

三世一切佛

心は諸の如来を造ると。

心造諸如來。

華嚴經唯心偈

心は巧みなる画師の種々の五蘊を画くが如く、一切の世界の中に法として造らざる無し。

心の如く仏も亦た爾り、仏の如く衆生も然り、心と仏と及び衆生と是の三に差別無し。

諸仏は悉く一切は心より転ずと了知したもう、若し能く是の如く解せば、彼人は真の仏を見ん。

心も亦た是れ身に非ず、身も亦た是れ心に非ざるも、一切の仏事を作すに自在なること未曾有なり。

若し人三世の一切の仏を求知せんと欲せば、応当に是の如く観ずべし、心は諸の如来を造ると。

華嚴經 唯心偈

心は、巧みな画家が様々な五蘊（から成る人）を描き上げるように、

心は巧みなる画師の種々の五蘊を画くが

一切の世界においてあらゆるものを造り出す。

如く、一切の世界の中に法として造らざ

る無し。

心のように仏もそうであり、

心の如く仏も亦た爾り、仏の如く衆生も

心と仏と衆生の三者に区別はない。

然り、心と仏と及び衆生と是の三に差別

無し。

仏たちは、すべてのものは心から生じることをはつきりと知っておられる。

諸仏は悉く一切は心より転ずと了知した

もし、このように理解したならば、

もう、若し能く是の如く解せば、彼の人

その人は真の仏

を見るだろう。

は真の仏を見ん。

心は身ではなく、

心も亦た是れ身に非ず、身も亦た是れ心

身は心ではないけれども、

に非ざるも、一切の仏事を作すに自在な

（心と身が深く関わり合うことによって）今まで経験した事のない

ほど自在に一切の仏事を行う。

ること未曾有なり。

もし、人が三世（過去・現在・未来）に渡って仏を求め続けるならば、

若し人三世の一切の仏を求知せんと欲せ

このように観察するべきである。

ば、応当に是の如く観ずべし、心は諸の

心は諸々の仏を造ると。

如来を造ると。

修証義

道元 正法眼藏 要約



修証義 第五章 行持報恩

第三十節より

光陰は矢よりも迅かなり、身命は露よりも脆し。何れの善巧方便ありてか、過ぎにし一日を復び還し得たる。徒らに百歳生けらんは、恨むべき日月なり、悲しむべき形骸なり。設い百歳の日月は、声色の奴婢と馳走すとも、其中一日の行持を行取せば、一生の百歳を行取するのみに非ず、百歳の他生をも度取すべきなり。此一日の身命は、尊ぶべき身命なり、貴ぶべき形骸なり。



修証義 第五章 行持報恩

第三十節より

月日は矢よりも速く、

光陰は矢よりも迅かなり、身命は露

人の命は露よりも脆く

はかないものです。

どのような巧みな手だてがあつたとしても、

よりも脆し。何れの善巧方便ありてか、

過ぎ去つた一日を再び取り返すことはできません。

過ぎにし一日を復び還し得たる。徒ら

無益に百年

生きたとしても、

うらみの多い月日（人生）であり、

に百歳生けらんは、恨むべき日月なり、

たとえ百年の月日（人生）は、

悲しむべき形骸なり。設い百歳の日月

環境と欲望の奴隷となつてふりまわされたとしても、

その中で一日

は、声色の奴婢と馳走すとも、其中一

無駄に過ぎた百年の月日（人生）が

日の行持を行取せば、一生の百歳を行

その一日の中に包み込まれていくだけでなく、

百年の他の人々の月日（人生）をも迷いから救

取するのみに非ず、百歳の他生をも度

い取つていくことでしょう。

この一日の命は、

取すべきなり。此一日の身命は、尊ぶ

尊ぶべき

命であり、

貴ぶべき肉体です。

べき身命なり、貴ぶべき形骸なり。



白骨の御文章

蓮如



白骨の御文章

蓮如

それ人間の浮生なる相をつらつら観ずるに、凡そはかなきことは、この世の始中終、幻の如くなる一期なり。されば、いまだ万歳の人身を受けたりということを聞かず。一生過ぎやすし。今に至りて、誰か百年の形体をたもつべきや。我や先、人や先、今日とも知らず、明日とも知らず、おくれ先だつ人は、本の雫、末の露よりもしげしと言えり。

されば、朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身なり。既に無常の風来りぬれば、すなわち二つの眼たちまちに閉じ、一つの息ながく絶えぬれば、紅顔むなしく変じて、桃李の装を失いぬるときは、

白骨の御文章 蓮如

さて、人間の浮き草のような奇る辺のない有様をよくよく観察してみると、

それ人間の浮生なる相をつらつら観この世に生まれて

ずるに、凡そはかなきことは、この世からおよそ、はかないものは、

から死ぬまでの、幻のような生涯です。

の始中終、幻の如くなる一期なり。さ

だから、いまだ万年の寿命を受けた人を聞いたことがありません。

れば、いまだ万歳の人身を受けたりと

人の一生はあつという間に過ぎていきます。

いうことを聞かず。一生過ぎやすし。

今までに、誰が百年その肉体(命)を保ったものがいるでしょうか。

今に至りて、誰か百年の形体をたもつ

自分が先か、

今日かも知れず、

べきや。我や先、人や先、今日とも知

明日かも知れず、

遅れる人先立つ人は、

らず、明日とも知らず、おくれ先だつ

根本に落ちる雫、

葉先の露よりも多いと言えます。

人は、本の雫、末の露よりもしげしと

言えり。

それゆえ、

朝には血色の良い顔色であっても、

夕方には白骨と

されば、朝には紅顔ありて、夕には

なってしまう身です。

今まさに無常の風が吹いてきたならば(死が

白骨となれる身なり。既に無常の風来り

訪れたならば、すぐに二つの眼がたちまちに閉じ、

ぬれば、すなわち二つの眼たちまちに閉じ、

一つの息が長く絶えてしまったなら、

血色の良い顔がむなしく変わ

一つの息ながく絶えぬれば、紅顔むなし

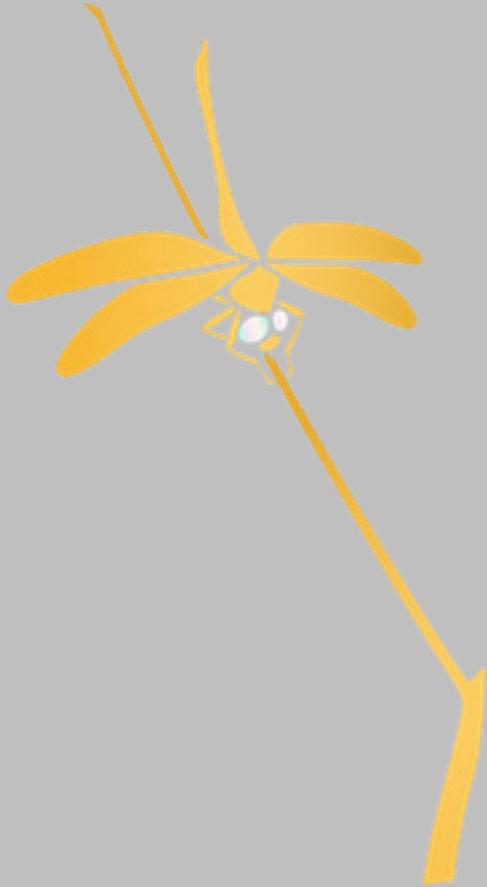
つて、

桃李の装い(芳しい姿)を失ってしまった時は、

く変じて、桃李の装を失いぬるときは、

六親・眷属集りて歎き悲しめども、更にその甲斐あるべからず。さてしもあるべき事ならねばとて、野外に送りて夜半の煙と為し果てぬれば、ただ白骨のみぞ残れり。あわれというも中々おろかなり。

されば、人間のはかなき事は老少不定のさかいなれば、誰の人も、はやく後生の一大事を心にかけて、阿弥陀仏を深くたのみまいらせて、念仏申すべきものなり。あなかしこ あなかしこ



親族・一族が集まって嘆き悲しんでも、

六親・眷属集りて歎き悲しめども、更もはや

どうしようもありません。

そのままにしておくわけには

にその甲斐あるべからず。さてしもあ

野辺に送って火葬にし、夜中に上る

るべき事ならねばとて、野外に送りて

煙と成り果てたならば、

ただ白骨だけが残つて

夜半の煙と為し果てぬれば、ただ白骨

います。

哀れと言う（言葉）だけではとても言い表せません。

のみぞ残れり。あわれというも中々お

ろかなり。

そもそも、

人の命のはかなさは老若にかかわりないのだから、

されば、人間のはかなき事は老少不

誰もが、いち早く

定のさかいなれば、誰の人も、はやく

後生の一大事（人はいつかは死ぬという事実）を心に留め置いて、

阿弥陀仏に深くおすがり

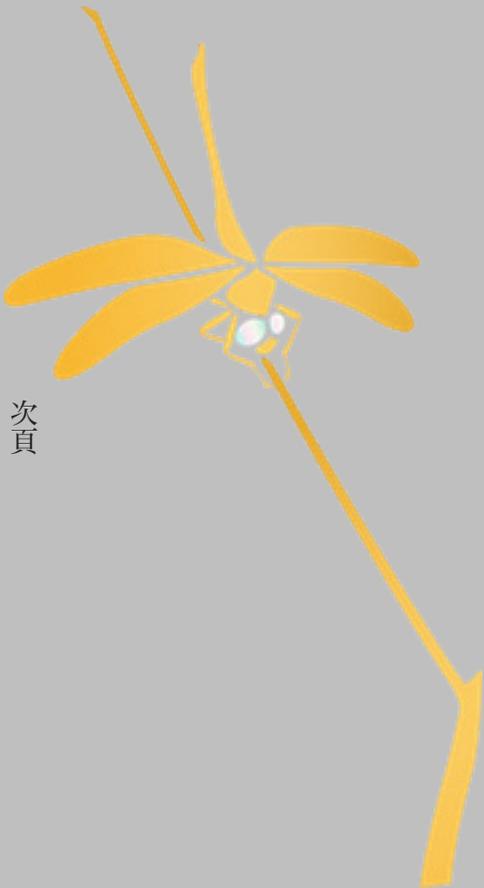
して、後生の一大事を心にかけて、阿弥陀仏

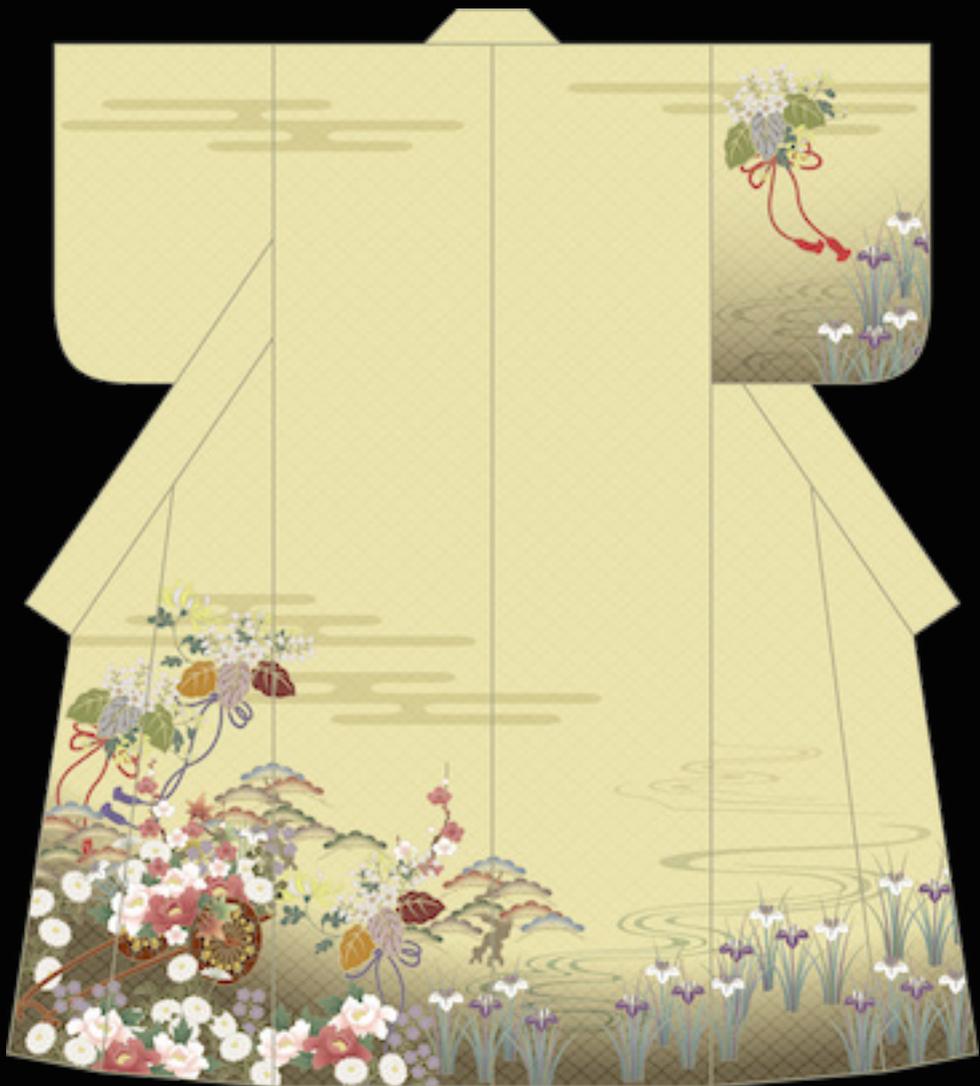
念仏をなされるべきです。

を深くたのみまいらせて、念仏申すべ

恐れ多く存じます。

きものなり。あなかしこ あなかしこ





風姿花伝

世阿弥

風姿花伝

別紙口伝

世阿弥

そもそも、花といふに、万木千草において、四季折節に咲くものなれば、その時を得てめづらしきゆゑに、もてあそぶなり。申樂も、人の心にめづらしきと知る所、すなはち面白き心なり。花と面白きとめづらしきと、これ三つは同じ心なり。いづれの花か散らで残るべき。散るゆゑによりて、咲く頃あればめづらしきなり。能も、住する所なきを、まづ花と知るべし。住せずして、余の風体に移れば、めづらしきなり。



風姿花伝 別紙口伝 世阿弥

そもそも、

(植物の) 花というものは、

あらゆるすべての草木において

そもそも、花といふに、万木千草にお

四季折々に咲くものであれば、

その

いて、四季折節に咲くものなれば、その

(咲く) 時を与えられているから珍しい(新鮮に感じる)のであり、

(人もそれを) もてはやす(喜ぶ)

時を得てめづらしきゆゑに、もてあそぶ

のである。

猿楽(能)も、

人(観客)の心に珍しいと(新鮮だと)感じる所が、

なり。申楽も、人の心にめづらしきと知

すなわち面白いという心である。

花と面白さと珍しき

る所、すなはち面白き心なり。花と面白

(新鮮さ)と、

この三つは同じ心(同じもの)である。

きとめづらしきと、これ三つは同じ心な

どんな花が散らずに残るだろうか(残るといふのか)。

(花は) 散る

り。いづれの花か散らで残るべき。散る

からこそ、

咲く頃があつて珍しい(新鮮な)のである。

ゆゑによりて、咲く頃あればめづらしき

能も、

一つの事に停滞することがないのを、

まず花と知るべきである。

なり。能も、住する所なきを、まづ花と

一つの事に停滞せず、

他の演目に移れば、

知るべし。住せずして、余の風体に移れ

(いつも) 珍しいのである(常に新鮮なのである)。

ば、めづらしきなり。



次頁



花鏡 世阿弥

花鏡

離見の見

世阿弥

また、舞に、目前心後と云ふことあり。「目を前に見て、心を後に置き」となり。これは、以前申しつる舞智風体の用心なり。見所より見る所の風姿は、わが離見なり。しかれば、わが眼の見る所は我見なり。離見の見にはあらず。離見の見にて見る所は、すなわち見所同心の見なり、その時は、わが姿を見得するなり。



花鏡

離見の見 世阿弥

また、舞に、目前心後ということがある。

また、舞に、目前心後と云ふことあり。
「目で前を見て、心を後に置け」との意味である。

「目を前に見て、心を後に置け」となり。
これは、

以前に述べた舞智の表現における心の用い方である。

これは、以前申しつる舞智風体の用心

観客席から見る役者の姿・演技は、

自分の離見

なり。見所より見る所の風姿は、わが

自分の目で見る(自分で意識する)所は

離見なり。しかれば、わが眼の見る所

我見(主観的な姿・演技)である。離見で見た自分の姿・演技ではない。

は我見なり。離見の見にはあらず。離

すなわち観客と同じ心で見た自分の姿・演技

見の見にて見る所は、すなわち見所同

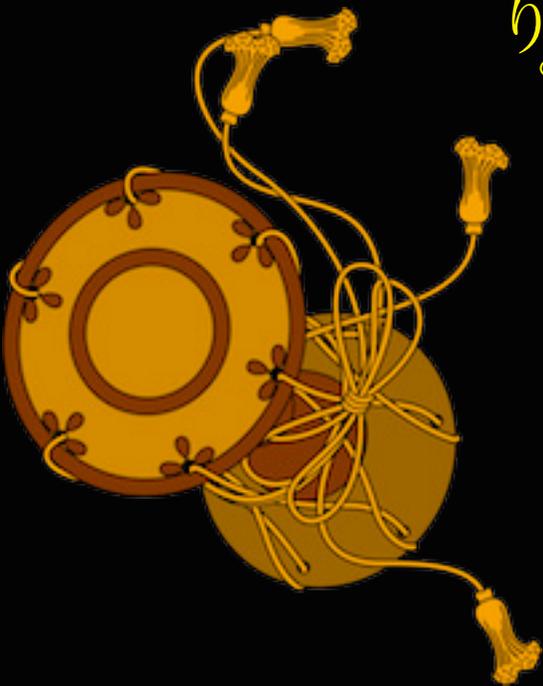
である。その時、

自分の本当の姿・演技を見極めるの

心の見なり、その時は、わが姿を見得

である。

するなり。



花鏡

初心不可忘

世阿弥

しかれば、当流に、万能一徳の一句あり。

初心不可忘

この句、三箇条の口伝あり。

是非初心不可忘

時々初心不可忘

老後初心不可忘

この三、よくよく口伝可為。



花鏡

初心不可忘

世阿弥

ならば、

我流派（観世流）に、あらゆる効能を一つの徳にまとめた一句（言葉）がある。

しかれば、当流に、万能一徳の一句あり。

初心忘るべからず

初心不可忘

この句（言葉）には、三ヶ条の口伝がある（三ヶ条を口づてに伝えていく）。

この句、三箇条の口伝あり。

是非の初心忘るべからず。

是非初心不可忘

時々の初心忘るべからず。

時々初心不可忘

老後の初心忘るべからず。

老後初心不可忘

この三つ、

よくよく口づてに伝えていきなさい。

この三、よくよく口伝可為。



花鏡

時節感当

世阿弥

申樂の当座に出でて、さし事・一声を出だすに、その時分の際あるべし。早きも悪し。遅きも悪かるべし。まづ、樂屋より出でて、橋がかりに歩み止まりて、諸方をうかがいて、すは声を出だすよと、諸人一同に待ち受くるすなわちに、声を出だすべし。是、諸人の心を受けて声を出だす、時節感当也。この時節少しも過ぐれば、又諸人の心ゆるくなりて、後に物を云い出だせば、万人の感にあたらず。この時節は、ただ見物の人の機にあり。人の機にある時節といつぱ、為手の感より見する際なり。是、万人の見心を、為手ひとりの眼睛へ引き入るる際也。当日一の大事の際也。

花鏡

時節感当 世阿弥

申樂の舞台上（役者が）出て（登場して）、

さし・一声の話をうたい出す時に、

申樂の当座に出でて、さし事・一声を

出だすに、その時（詠をうたい出す時）のタイミングがある。（それは）早くてもよくない。

（かといつて）遅くてもよくはない。

まず、樂屋より出て、

悪し。遅きも悪かるべし。まづ、樂屋より

橋掛かりで歩みを止め、

周り（観客席）の

出でて、橋がかりに歩み止まりて、諸方を

様子をかががって、

さあ声を出すぞと、

観客一同が待ち

うかがいて、すは声を出だすよと、諸人一

受けるその瞬間に、

声を出すべきである。

同に待ち受くるすなわちに、声を出だすべ

これが、

観客の心を受けて（期待に応えて）声を出す、

し。是、諸人の心を受けて声を出だす、時

時節感当である。

このタイミングが少しでも遅くなると

また、観客

節感当也。この時節少しも過ぐれば、又諸

人の心が緩んでしまい、

（心が緩んだ）後にうたい出せば（出したのでは）、

人の心ゆるくなりて、後に物を云い出だせ

すべての観客の感覚に響かない（和合しない）。

このタイミングは、

ば、万人の感にあたらず。この時節は、た

ただ観客の機（きざし、きつかけ）にある。

観客の機（きざし、きつかけ）にあるタイミング

だ見物の人の機（きざし、きつかけ）にあり。人の機（きざし、きつかけ）にある時節

というのは、

役者の感覚（直感）によって見て取るタイミングである。

これは、

といっぱ、為手の感より見する際なり。是、

（舞台を見て）すべての観客の心を、

役者一人が目に入る状態に引き入れる（役者一人に集中させる）

万人の見心を、為手ひとり（ひとり）の眼睛へ引き入

タイミングである。

当日（その日）一番大切なタイミングである。

る際也。当日一の大事の際也。

南方錄

南坊宗啓



南方録

覚書

小座敷の茶の湯は、第一仏法を以て、修行得道する事也。家居の結構、食事の珍味を楽ししみとするは俗世の事也。家はもらぬほど、食事は飢えぬほどにてたる事也。是仏の教え、茶の湯の本意也。水を運び、薪をとり、湯をわかし、茶をたてて、仏にそなえ人にもほどこし、吾ものむ。花をたて香をたく、みなみな仏祖の行いのあとを学ぶ也。



南方録 覚書

前頁

小座敷の茶の湯は、

まず一番に仏教の教えを以て、

修行し悟りを得る事である。住まいの満足、第一仏法を以て、食事の珍珠

修行得道する事也。家居の結構、食事

の珍珠を楽しむとすることは俗世の事也。

家は雨漏りがしない程度、

食事は飢えない程度で十分である。

家はもらぬほど、食事は飢えぬほどに

これが仏の教え、

茶の湯の本来の心（真髓）

てたる事也。是仏の教え、茶の湯の本

である。

水を運び、

薪を取り、

湯を沸かし、

意也。水を運び、薪をとり、湯をわかし、

仏に供え人にもほどこし、

茶をたてて、仏にそなえ人にもほどこ

自分も飲む、

花を活けて香をたく、

し、吾ものむ。花をたて香をたく、み

これらはすべて釈迦と祖師の修行の後を学ぶことである。

なみな仏祖の行いのあとを学ぶ也。



次頁

南方録

滅後

さて又侘の本意は、清浄無垢の仏世界を表わして、この露地草庵に至りては、塵芥を払却し、主客ともに直心の交わりなれば、規矩寸尺、式法等、あながちに云うべからず。火をおこし、湯をわかし、茶を喫するまでのこと也。他事あるべからず。これ則仏心の露出する所也。



南方録 滅後

さて、また侘の本質は、

清浄無垢の仏の世界を表わしており、

さて又侘の本意は、この露地と草庵に至っては、清浄無垢の仏世

界を表わして、亭主と客が直心の交わりをする場であるので、この露地草庵に至りては、

塵芥を払却し、

塵芥を払却し、式法等を、主客ともに直心の交わり

規矩寸尺、

なれば、式法等を、規矩寸尺、むやみに言い立てるべきで式法等、あながちに

はない。

(ただ) 火を起こし、

湯をわかし

云うべからず。火をおこし、その他(それ以外)は何もない。湯をわかし、

茶をたてて飲むだけのことである。

茶を喫するまでのこと也。他事あるべか

これが則ち、仏の心が現われ出る所なのである。

らず。これ則ち仏心の露出する所也。





五輪書

宮本武蔵

五輪書

地の巻

宮本武蔵

大形武士の思ふ心をはかるに、武士は只死ぬるといふ道を嗜む事と覚ゆるほどの儀也。死する道に於ては、武士斗にかぎらず、出家にても、女にても、百姓以下に至る迄、義理をしり、恥を思ひ、死する所を思ひ切る事は、其差別なきもの也。武士の兵法を行ふ道は、何事に於ても人にすぐるゝ所を本とし、或は一身の切合に勝ち、或は数人の戦に勝ち、主君の為、名をあげ身をたてんと思ふ。是、兵法の徳を以てなり。



五輪書

地の巻

宮本武蔵

だいたい、武士の武士たるゆえんを考えてみるに、

大形武士の思ふ心をはかるに、武士は

死ぬ覚悟（準備）ができてから武士なのであると一般には考えられている。

只死ぬるといふ道を嗜む事と覚ゆるほど

（けれども）死の覚悟においては、

武士ばかりに限らず、

の儀也。死する道に於ては、武士斗にか

出家（僧侶）であれ、

女であれ、

百姓以下に至る

ぎらず、出家にても、女にても、百姓以

義理を知り、

恥を思ひ、

死を

下に至る迄、義理をしり、恥を思ひ、死

決心をする事は、

そこに変わりはないのである。

する所を思ひ切る事は、其差別なきもの

武士が兵法の道に励むのは、

何事においても人に勝つこと

也。武士の兵法を行ふ道は、何事に於て

を根本として、

あるいは一人の敵との切り合い

も人にすぐるゝ所を本とし、或は一身の

に勝ち、

あるいは数人の敵との戦いに勝ち、

主君のため、

切合に勝ち、或は数人の戦に勝ち、主君

自分の名をあげ身をたてようと（立身出世しよう）思う事。

これが、

の為、名をあげ身をたてんと思ふ。是、

兵法の功德である。

兵法の徳を以てなり。



五輪書

空の巻

宮本武蔵

武士は兵法の道をたしかに覚え、其外武芸を能くつとめ、武士のおこなふ道、少しもくらかず、心のまよふ所なく、朝々時々におこたらず、心意二つの心をみがき、観見二つの眼をとぎ、少しもくもりなく、まよひの雲の晴れたる所こそ、実の空としるべき也。



五輪書

空の巻

宮本武蔵

武士は兵法の道に会得し、

武士は兵法の道をたしかに覚え、其

武士として行う道に、

その

他の武芸をよく鍛錬し、

外武芸を能くつとめ、武士のおこなふ道、

心に迷いがなく、

(何事も)常に

少しもくらかず、心のまよふ所なく、朝々

怠らず、

心意二つの心を磨き、

時々におこたらず、心意二つの心をみが

観見二つの眼をとぎ、

少しもくもりなく、

観見二つの眼をとぎ、少しもくもり

まよひの雲の晴れた所こそ、

真実の

なく、まよひの雲の晴れたる所こそ、実

空であると知るべきである。

の空としるべき也。





葉 隱

山本常朝

葉隠 聞書第一 一一

武士道といふは、死ぬ事と見附
けたり。二つくの場にて、早
く死ぬ方に片附くばかり也。別
に仔細なし。胸すわつて進む也。
圖に当たaraぬは犬死などといふ
ことは、上方風の打上がりたる
武道なるべし。二つくの場に
て、圖に当たるやうにする事は
及ばざる事也。我人、生る方が
好き也。多分好きの方に理が附
くべし。若し圖にはづれて生き
たらば腰ぬけ也。此境危ふき也。

葉隠 聞書第一 一一

前頁

武士道というのは、

死ぬことであると見つけた（悟った）。

武士道といふは、死ぬ事と見附

（生きるか死ぬかの）二者択一の場合（生死を賭けた戦いの場）では、

けたり。二つくの場にて、早

早く死ぬ方を選ぶだけのことだ。

別に

く死ぬ方に片附くばかり也。別

理由があるわけではない。

覚悟を決めて（腹を据えて）進むのである。

に仔細なし。胸すわつて進む也。

自分の意図する通りにならないければ（戦いに敗れたら）犬死であるなどというのは、

圖に当たたらぬは犬死などといふ

上方風（都会風）の気位ばかりが高い武道である。

ことは、上方風の打上がりたる

（生きるか死ぬかの）二者択一の場合（生死を賭けた戦いの場）

武道なるべし。二つくの場に

では、

自分の意図した通りになることは不可能なことである（必ず戦いに勝つと

て、圖に当たるやうにする事は

いう保証はどこにもない。

私も他人も（人間である限り）、（死ぬより）生きて

及ばざる事也。我人、生る方が

多分生きるためならどんな理屈（言い訳）も考えつくことだろう。

好き也。多分好きの方に理が附

もし自分の意図に外れて（戦いに敗れて）（理屈をつけて・言い訳して）

くべし。若し圖にはづれて生き

生き延びたなら腰抜けである（臆病者と非難される）。

この境が危ない（ここが難しい）。

たらば腰ぬけ也。此境危ふき也。

次頁



圖にはづれて死にたらば、犬死
氣違にて、恥にあらず。是が武
道に丈夫也。毎朝毎夕、改めて
は死に、改めては死に、常住死
身に成て居る時は、武道に自由
を得、一生落度なく、家職を仕
課すべき也。

(一方) 自分の意図に外れて(戦いに敗れて)死んだならば、

犬死だ、氣違

圖にはづれて死にたらば、犬死

だとそしられても、(死んでしまえば言い訳できないので)恥ではない。

これが武道を心得た者

氣違にて、恥にあらず。是が武

(がとるべき態度)である。

毎朝毎夕、

改めては死に(新たな

道に丈夫也。毎朝毎夕、改めて

気持ちで死と向き合い、

改めては死に(新たな気持ちで死と向き合い)、

常に心身が死と一体

は死に、改めては死に、常住死

になっている時は、

武道は自由自在の境地を得て、

身に成て居る時は、武道に自由

一生涯落ち度なく、

家職(家の職務)を全うする

を得、一生落度なく、家職を仕

であらう。

課すべき也。

葉隠 聞書第一 百十四

「武士道は死狂ひ也、一人の殺害を數十人して仕かぬるもの。」と、直茂公仰られ候。本氣にては大業はならず、氣違ひになりて死狂ひするまで也。又武士道に於て分別出来れば、早後るゝ也。忠も孝も入らず、武道に於ては死狂ひ也。この内に忠孝は自ら籠るべし。

葉隠 聞書第一 百十四

「武士道とは死に狂いである。」

「武士道は死狂ひ也、一人の殺

害を數十人で殺そうとしても出来かねる（できない）ものである。」と、

害を數十人して仕かぬるもの。」

直茂公はおつしやられた。

正気では大きな仕事を成し

と、直茂公仰られ候。本氣にて

遂げることはできない。

気違いになって死に狂いするまでである。

は大業はならず、氣違ひになり

又武士道においては分別でき

て死狂ひするまで也。又武士道

れば（思考を働かすなら・頭で考えるなら）、

（その時点で）早くも後れを

に於て分別出来れば、早後るゝ

取っている。忠も孝も（善悪を）思考で判断する必要はない（考えなくてよい）。武士道においては

也。忠も孝も入らず、武道に於

死に狂いである。

この中に忠孝（善悪）は自ずから内包されているの

ては死狂ひ也。この内に忠孝は

である。

自ら籠るべし。

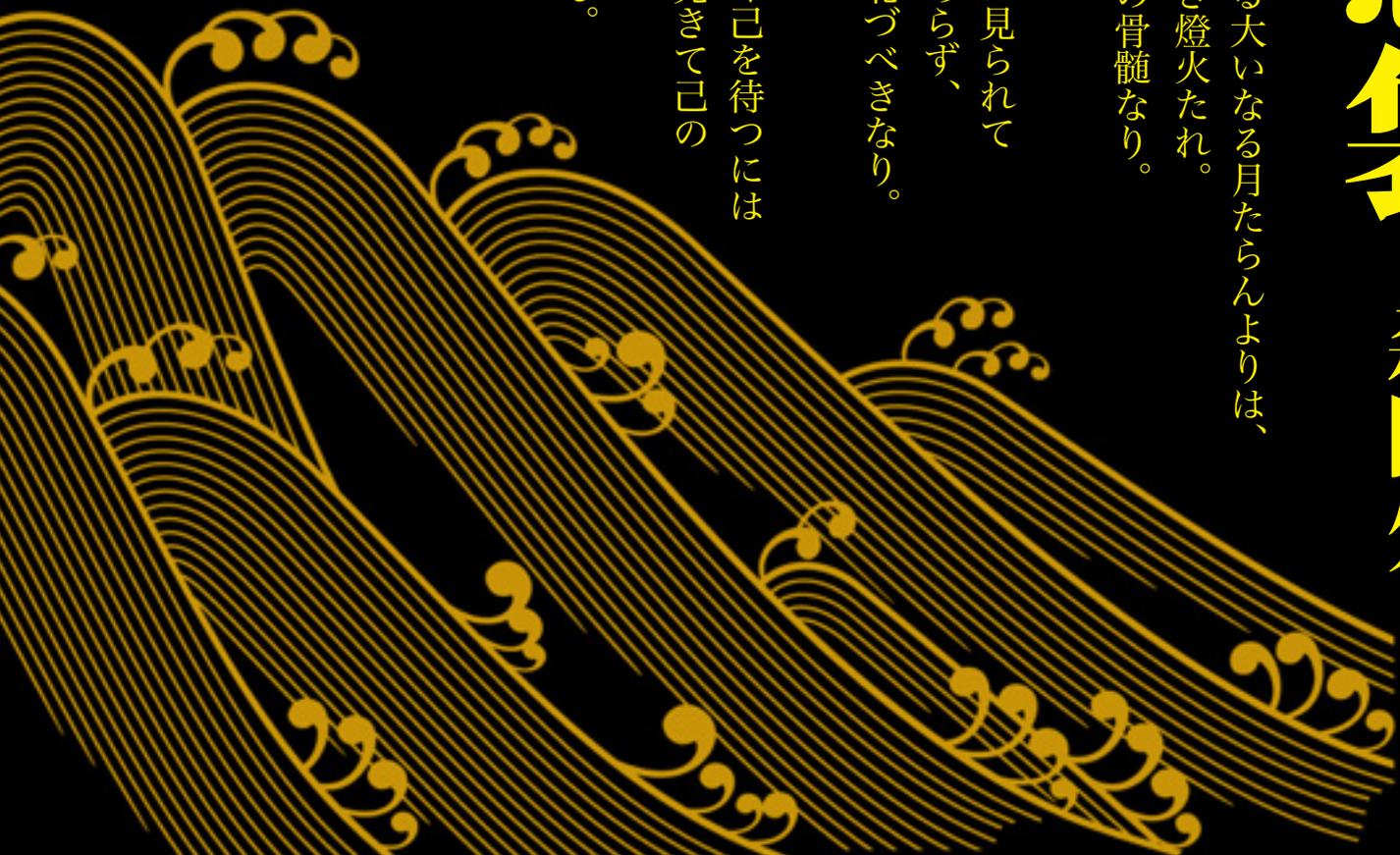
知恵袋

森鷗外

日の光を藉りて照る大いなる月たらんよりは、
自ら光を放つ小さき燈火たれ。
是れ鶏口牛後の説の骨髓なり。

恥づべき事は、人に見られて
始めて恥づべきにあらず、
人見ざるも亦自ら恥づべきなり。

人を待つには厳しく己を待つには
寛く、人の瑕瑾を発きて己の
疵病を愛しむは
卑陋の限りなるべし。



知恵袋

森鷗外

人の短と人の長

人の短を言ふこと勿れとは、翅に徳を立つる上の教のみならず、亦世に処する上の教えなり。人の短によりて我長を示さんとするは、盲と明を争い、聾ひたるものと聴を争い、侏儒とせいくらべせんが如し。

人の長を以て我長を継がんと欲すること勿れ、人の光を藉りて我光を増さんと欲すること勿れ、日の光を藉りて照る大いなる月たらんよりは、自ら光を放つ小さき燈火たれ。是れ鶏口牛後の説の骨髓なり。

知恵袋 森鷗外

人の短所と人の長所

人の短と人の長

人の短所を言つてはならないとは、

ただ道徳上の教え

人の短を言ふこと勿れとは、また処世の上での教え 翅に徳

であるのみでなく、

を立つる上の教のみならず、亦世に処

人の短所と比較することによって自分の長所を示

でもある。

する上の教えなり。人の短によりて我

うとするのは、

盲人とよく見えることを争い、

長を示さんとするのは、盲人とよく見えることを争い、 盲と明を争い、

聾者（耳の聞こえない人）とよく聞こえることを争い、

小人（背の低い人）と背比べを

聾ひたるものと聡を争い、侏儒とせい

しているようなものだ。

くらべせんが如し。

人の長所（名声や権威）を自分の名声や権威の如くに言い継いで（言い伝えては）ならない、

人の長を以て我長を継がんと欲する

人の威光を借りて自分をよく見せようとしてはならない。

こと勿れ、人の光を藉りて我光を増さ

日（太陽）の光を反射して照り輝く大きな

んと欲すること勿れ、日の光を藉りて

自ら光を放つ小

照る大いなる月たらんよりは、自ら光

なともしび（ろうそくの炎）であれ。

これこそが鶏口となるも牛後となるな

を放つ小さき燈火たれ。是れ鶏口牛後

かれということわざの真髓である。

の説の骨髓なり。



論語と算盤

渡沢栄一

論語と算盤

常識とは如何なるものか 渋沢栄一

常識とは如何なるものであるか。

余は次の如く解釈する。すなわち、事に当たりて奇矯に馳せず、頑固に陥らず、是非善悪を見別け、利害得失を識別し、言語挙動すべて中庸に適うものがそれである。これを学理的に解釈すれば、「智・情・意」の三者が各々権衡を保ち、平等に発達したものが完全の常識だろうと考える。

意志の鞏固なるが上に聡明なる知恵を加味し、これを調節するに情愛をもつてし、この三者を適度に調合したものを大きく発達せしめて行つたのが、初めて完全なる常識となるのである。

論語と算盤

常識とは如何なるものか 渋沢栄一

常識とはどのようなものであろうか。

常識とは如何なるものであるか。

すなわち、

事に

私は次のように解釈（理解）する。
余は次の如く解釈する。すなわち、事

当たって常識はずれの言動をせず、

頑固でなく、

に当たりにて奇矯に馳せず、頑固に陥ら

事の良し悪し・善悪をわきまえ、

利害得失を識別し、

ず、是非善悪を見別け、利害得失を識

言動と挙動（立ち居振る舞い）のすべてが極端にどちらかに傾かずバランスを保って

別し、言語挙動すべて中庸に適うもの

いるのがそれである。

これを学理的（学問的）に解釈すれば、

がそれである。これを学理的に解釈す

「智・情・意」の三者がそれぞれつり合いを保ち、

れば、「智・情・意」の三者が各々権衡

平等に発達したものが完全なる常識であると考える。

を保ち、平等に発達したものが完全の

常識だろうと考える。

強固な意志に聡明な知恵を加え、

意志の鞏固なるが上に聡明なる知恵を

これを情愛で調節し、

加味し、これを調節するに情愛をもつて

この三者（智・情・意）を適度に調合したものを大きく発達させていったのが（させていくと、

し、この三者を適度に調合したものを大

初めて完全なる常識と

きく発達せしめて行つたのが、初めて完

なるのである。

全なる常識となるのである。

論語

論語学而第一 一章

子曰、學而時習之、不亦說乎、
有朋自遠方來、不亦樂乎、
人不知而不愠、不亦君子乎、

論語学而第一 一章

子曰く、

学んで時に之を習う、

子曰、學而時習之、不亦說乎、

亦た説ばしからずや。

朋有り遠方より來たる、

亦た樂しからずや。

有朋自遠方來、不亦樂乎、

人知らずして慍らず、

亦た君子ならずや。

人不知而不慍、不亦君子乎、

論語学而第一 一章

子曰く、学んで時に之を習う、亦た説ばしからずや。

朋有り遠方より来たる、亦た楽しからずや。人知らずして慍らず、亦た君子ならずや。

論語学而第一 一章

孔子（先生）が言われた、

学んで常にそれを何度も繰り返し復習する、

子曰く、学んで時に之を習

なんと喜ばしいことではないか。

う、亦た説ばしからずや。

友人が遠方より訪ねて来る、

朋有り遠方より来たる、亦

なんと楽しいことではないか。

人が（自分のことを）認めて

た楽しからずや。人知らず

くれなくても腹を立てない、

なんと（これこそが）君子ではないか。

して慍らず、亦た君子なら

ずや。

夜直

王安石

月移花影上欄干



夜直

金爐香盡漏聲殘

剪剪輕風陣陣寒

春色惱人眠不得

月移花影上欄干



夜直

前頁

金炉

香尽きて

漏声残く、

金爐香盡漏聲殘

剪剪たる輕風

陣陣として寒し。

剪剪輕風陣陣寒

春色

人を悩まして

眠り得ず、

春色惱人眠不得

月移りて

花影欄干に上らしむ。

月移花影上欄干



書き下し文

夜直

金炉香尽きて漏声残く，
剪剪たる軽風陣陣として寒し。
春色人を悩まして眠り得ず，
月移りて花影欄干に上らしむ。



夜直

金の香炉の香はいつしか燃え尽き、

水時計の音もかすかになつてきた。

金炉香尽きて漏声残く、

切れ切れに吹き続いて肌寒い。

剪剪たる軽風陣陣として寒し。

冷たい夜の微風が、

春の気配が人を悩まして（物思いにふけさせて）、

春色人を悩まして眠り得ず、

気がつけば月は西へと移つて花の影が欄干に上っている。

月移りて花影欄干に上らしむ。



春夜

蘇軾

春宵一刻值千金



春夜

蘇軾

春宵一刻值千金
花有清香月有陰
歌管樓台聲細細
鞦韆院落夜沈沈



春夜 蘇軾

春宵

一刻

值千金

春宵一刻值千金

花に清香有り

月に陰有り

花有清香月有陰

歌管

楼台

声細細

歌管楼台声細細

鞦韆

院落

夜沈沈

鞦韆院落夜沈沈



書き下し文

春夜

蘇軾

春宵一刻值千金

花に清香有り月に陰有り

歌管楼台声細細

鞦韆院落夜沈沈



春夜 蘇軾

春の夜のひとときは千金に値する（ほど素晴らしい）。

春宵一刻值千金

花は清らかに香り、

月はおぼろにかすむ。

花に清香有り 月に陰有り

歌声や管楽器の音が響いていた楼台も、今は声がかすかに聞こえるのみ。

歌管楼台声細細

ぶらんこのある中庭は、

夜がしんと（静かに）更けていく。

鞦韆院落夜沈沈



おくのほそ道
旅立ち

行く春や鳥啼き魚の目は涙



おくのほそ道 旅立ち

弥生も末の七日、明ぼのの空朧々と
して、月は有明けにて光おさまれる
ものから、不二の峰かすかにみえて、
上野・谷中の花の梢、またいつかは
と心細し。むつまじき限りは宵より
つどひて、舟に乗りて送る。千住と
いふ所にて舟を上がれば、前途三千
里の思ひ胸にふさがりて、幻のちま
たに離別の涙をそそぐ。

行く春や鳥啼き魚の目は涙

是を矢立ての初めとして、行く道な
ほ進まず。人々は途中に立ち並びて、
後ろ影の見ゆるまではと、見送るな
るべし。

おくのほそ道 旅立ち

(旧暦) 三月も末の二十七日、

曙(夜明け)の空はおぼろに(ぼうつと)霞んで、

弥生も末の七日、明ぼの空朧々と

月は有明の月(夜が明けても残っている月)で光は薄いけれども、

して、月は有明けにて光おさまれる

富士の峰がかすかに見えて、

ものから、不二の峰かすかにみえて、

上野・谷中の桜の梢を、

またいつか眺めることができるだろう

上野・谷中の花の梢、またいつかは

うかと心細く思われる。

親しい人たちだけは(に限っては)前の晩から集まって、

と心細し。むつまじき限りは宵より

船と一緒に乗って見送ってくれる。千住と言うところ

つどひて、舟に乗りて送る。千住と

で船を降りれば、

この先二千里の(はるか遠い)

いふ所にて舟を上がれば、前途三千

旅がいよいよ始まるのだという思いで胸がいっぱいになり、

幻の如きはかないこの世

里の思ひ胸にふさがりて、幻のちま

での別れ道に立って、離別の涙がこぼれ落ちるのであった。

たに離別の涙をそそぐ。

今春が過ぎ去って行こうとしている。春との別れを惜しんで、鳥は鳴き、魚の目は泪(涙)で溢れている。

行く春や鳥啼き魚の目は涙

これを矢立ての使い始め(旅日記の書き始め)として旅に出立したのだが、別れを惜しんで旅路に歩が

是を矢立ての初めとして、行く道な

進まない。

見送りの人々は道の途中に立ち並んで、

ほ進まず。人々は途中に立ち並びて、

われわれの後ろ姿が見えるまでは(見送ろう)と、

見送っているのだろう。

後ろ影の見ゆるまではと、見送るな

るべし。

The background features a teal gradient with stylized maple leaves in shades of blue and green, some with gold outlines, falling from the top. At the bottom, there are light-colored, swirling patterns representing water ripples.

おくのほそ道

白河の関

卯の花をかざしに関の晴着かな

おくのほそ道 白河の関

心もとなき日数重なるままに、白河の関にかかりて旅心定りぬ。「いかで都へ」と便り求しも埋なり。中にも此関は三関の一にして、風騒の人心をとどむ。秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲そひて、雪にもこゆる心地ぞする。

古人冠を正し衣装を改めしことなど、清輔の筆にもとどめ置れしとぞ。

卯の花をかざしに関の晴着かな 曾良

おくのほそ道 白河の関

期待と不安の入り混じった落ち着かない気持ちの（で旅を続ける）日々が続くうちに、白河の関に
心もとなき日数重なるままに、白河
さしかかって、（ようやく）旅心（旅をする心）が定まった。
（昔、平兼盛が）「白河の関を越え

の関にかかりて旅心定りぬ。「いかで
た感動を何とか都へ伝えたい」と便り（つて・手段）を求めたのも当然である。 数ある関所の中でも

都へ」と便り求しも埋なり。中にも
この白河の関は三関の一つであり、 風流を楽しむ人が心を寄せた

此関は三関の一にして、風騒の人心
場所である。 （能因法師が歌に詠んだ）秋風を耳に思い感じ、 （源頼政が歌に詠んだ）紅葉の

をとどむ。秋風を耳に残し、紅葉を
情景をまぶたに思い浮かべると、今はまだ青葉である梢がいつそう趣深い。

俤にして、青葉の梢なほあはれなり。
真つ白な卵の花に、 茨の花の白さが咲き加わって、

卵の花の白妙に、茨の花の咲そひて、
雪景色よりもなお白さが越える気持ちがある。

雪にもこゆる心地ぞする。
昔の人は冠を正しく被り直し、正装に着替えてこの関を越えたことが、

古人冠を正し衣装を改めしことなど、
藤原清輔の文章にも書き留められているようだ。

清輔の筆にもとどめ置れしとぞ。

（今の私には冠も正装もないが、）卵の花を挿頭にして白河の関を越える晴着としよう。

卵の花をかざしに関の晴着かな 曾良

一枚起請文

もろこし我が朝に、もろもろの
知者達の沙汰し申さるる、観念
の念にもあらず。

又学問をして念のこころを悟り
て申す念仏にもあらず。ただ往
生極樂のためには、南無阿弥陀
仏と申して、うたががなく往生
するぞと思ひ取りて申す外には
別の仔細候わず。

ただし三心四修と申すことの候
うは、皆決定して南無阿弥陀仏
にて往生するぞと思ひうちこ
もり候うなり。

(わたくしの念仏は) 中国や日本の
 もろこし我が朝に、もろもろの
観念の念仏(心
 念の念仏(心

知者達の沙汰し申さるる、観念
 の念にもあらず。
に仏の姿をありありと思ひ浮かべる念仏)ではありません。

また、経典や注釈書を頼りに学問して念仏の心(意味)を悟って(理解して)称える念仏(理の念仏)
 又学問をして念のこころを悟り
ただ極楽に往生する
 でもありません。

て申す念仏にもあらず。ただ往
(生まれ変わる)ためには、
 南無阿弥陀仏と称えて(称えれば)、

生極楽のためには、南無阿弥陀
疑いなく(間違いない)極楽に往生すると思ひ悟って(信
 仏と申して、うたがいなく往生

するぞと思ひ取りて申す外には
じて)(信心決定・しんじんけつじょう)念仏を称えるほかに特別の理由はありません。

別の仔細候わず。
ただし念仏を称える上での心の持ち方である三心と念仏を称える態度である四修というものがありますが、

ただし三心四修と申すことの候
それらは皆、南無阿弥陀仏と称えれば必ず極楽に往生するぞ(往生できるぞ)と

うは、皆決定して南無阿弥陀仏
思うち(信じる中)(信心決定・しんじんけつじょう)におのずから具わってくるのです。

にて往生するぞと思いうちにこ
 もり候うなり。

この外に奥ふかき事を存ぜば、
二尊のあわれみにはずれ、本願
にもれ候うべし。

念仏を信ぜん人は、たといい代
の法をよくよく学すとも、一文
不知の愚鈍の身になして、尼入
道の無智のともがらに同じうし
て、智者のふるまいをせずして、
ただ一向に念仏すべし。

証のために両手印をもつてす。

浄土宗の安心起行、この一紙に
至極せり。源空が所存、この外
に全く別儀を存ぜず。滅後の邪

このほかに、極樂往生のための奥深い教えを知っている（があると考えられる）ならば、この外に奥ふかき事を存ぜば、生きとし生けるものすべてを救済する阿弥陀仏の本願からもらってしまうでしょう。

二尊のあわれみにはずれ、本願にもれ候うべし。

念仏を信じる人は、

たとえ、お釈迦様が一代（生涯）を

念仏を信ぜん人は、たとい一代（自分自身を）

かけて残された教え（仏法）をよく学んだとしても、

の法をよくよく学すとも、一文（自分自身を）

文字一つ知らない（全く字の読めない）愚者とみなして、

尼入道（在家の

不知の愚鈍の身になして、尼入（在家の）

まま形だけ剃髪した者）といった無知な形だけの出家者たちと同じ立場に立って、

道の無智のともがらに同じうし

知者の振る舞いをせず、

て、智者のふるまいをせずして、ただ一向きに（ひたすら）念仏を称えるべきです。

ただ一向に念仏すべし。

（偽りでないことの）証明として両手で印を押します。

証のために両手印をもつてす。

浄土宗における安心（心の持ち方）と起行（修行のやり方）は、この一枚に書き尽くされています。

浄土宗の安心起行、この一紙に

私（源空〓法然）の考えは、

この他には全く特別

至極せり。源空が所存、この外

なことは存在しません（ありません）。

私が亡くなった後に誤った

に全く別儀を存ぜず。滅後の邪

義をふせがんがために所存を記
し畢んぬ。

建曆二年正月二十三日

大師在御判

考えが出てくるのを防ぐために私の考えを記し終えました（書き残しました）。

義をふせがんがために所存を記し畢んぬ。

建暦二年（一二二二年）一月二十三日（法然の亡くなる二日前）

建暦二年正月二十三日

源空 花押在り。

大師在御判

歎異抄

第三条

一、善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを世のひとつねにいはく、悪人なを往生す、いかにいはんや善人をや。この条、一旦そのいはれあるにたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむこゝろかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のこゝろをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、

第三条

一、善人てさえ極樂浄土へ往生できる、

一、善人なほもて往生をとぐ、
まして悪人が（往生できないはずはない）
いはんや悪人をや。しかるを世

（この言葉は）、
一応もつともな道理があるように思われるが、
まして善人が極樂浄土へ往生できるのはいうまでもない。
悪人てさえ極樂浄土へ往生で

のひとつねにいはいはく、悪人なを
往生す、いかにいはいはんや善人を

や。この条、一旦そのいはれあ
るににたれども、本願他力の意

趣にそむけり。そのゆへは、自
力作善のひとは、ひとへに他力

信じてそれをたのむ心が欠けているので、
をたのむこゝろかけたるあひだ、
阿弥陀仏の本願に背くものである。

阿弥陀の本願にあらず。しかれど
も、自力のこゝろをひるがへし

て、他力をたのみたてまつれば、

（そのような人も）自力のこゝろを翻して、
他力を信じてそれをたのめば、

て、他力をたのみたてまつれば、

て、他力をたのみたてまつれば、

眞実報土の往生をとぐるなり。
煩惱具足のわれらは、いづれの
行にても生死をはなるゝことあ
るべからざるをあはれみたまひ
て、願をおこしたまふ本意、悪
人成仏のためなれば、他力をた
のみたてまつる悪人、もとも往
生の正因なり。よて善人だにこ
そ往生すれ、まして悪人はと、
おほせさふらひき。

阿弥陀仏のおられる真実の浄土へ往生をとげることができるのである。

真実報土の往生をとぐるるなり。
いかなる修行を自力で行つ

煩惱にまみれた私たちは、

煩惱具足のわれらは、いづれの
ても生死（輪廻転生）を離れることができないことをあわれんで、

行にても生死をはなるゝことあ

るべからざるをあはれみたまひ

本願をおこされた阿弥陀仏の本心は、

このよ

て、願をおこしたまふ本意、悪

うな悪人（煩惱にまみれた私たち）を仏にするためであるので、

阿弥陀仏の本願他力をたのむ

人成仏のためなれば、他力をた

もつともすぐれた極楽浄土に

のみたてまつる悪人、もとも往

往生するための正しい因（種）なのである。

よって善人でさえ浄土へ往生できる、

生の正因なり。よて善人だにこ

まして悪人が（往生できないはずはない）と、

そ往生すれ、まして悪人はと、

おっしやったのである。

おほせさふらひき。

名文電子読本

制作・デジタル編集：有限会社 DCP

〒 733-0013 広島市西区横川新町 6-6-1906

(C) 2024 DCP Corporation. All Right Reserved.